

序

呂坤『呻吟語』に「君始めに以て險と為せしは、是れ險ならず。近ごろ以て險ならずと為すは、却つて是れ險なり」という言葉がある。

知のありかたに惹き付けて考えれば、知の営みそのものに潜む「險」なるものを自覚し続ける限りは知は危うさを免れるが、知的営為が知ることそのものに慣れ問いの深刻さを忘却し安定してくると、知はたちまち危殆に瀕する、ということになるであろうか。

この時代に限ったことではないが、知識の蓄積を願う余り、問うことの深刻さを速やかに忘却する傾きがある。われわれの時代はかつてキルケゴールが批判した「饒舌」を質量ともに遙かに上回る「饒舌」の時代であり、入力と出力の間を限りなく短縮する効率化、高速化の時代である。このような時代にあつてはキルケゴールがソクラテスにその典型を見た「立ち止まって思いを潜める」ことは難しいであろう。ましてやあえて問いそのもののもつ「險」なるものに立ち止まることはさらに困難である。われわれを呑み込む過剰な饒舌は、ひとたび「險」とされた「問題」をいつのまにか「險」ならざる「話題」の集合に組み込んでゆくからである。いまや藝術的なものも美的なるものもあるいは総じて文化と呼ばれるものも、そこにどのような限定が賦されるにせよ、すでに問題の地平から話題の領域に移行しこの社会に安住しきつているように見える。

学の存在理由を問われれば、まずもって「険」なるものを直視し、あらためて事を問い直すところにあると言ふべきであろう。梅園の響みに倣つて言えば、それはすでに慣れ親しんでいる問題や方法を「素」に立ち帰つて構築し直すところにある。私ごとではあるが、南ドイツの古い大学で哲学の学徒に向かつて繰り返し *Reduktion* を説いた老師の姿をしばしば想い出す。「一歩一歩思索する」という師父の言葉が今なお重く響いてくる。

「汝自身を知れ」という古代の箴言は、諸問題の平準化と実学志向が怪しまれない現代であつて、あらためて思索への沈潜を迫るところにその存在理由を見いだすと言える。しかるに、「私自身は、デルフォイの神殿の銘が命じるようには、いまだ自分自身を知ることができないでいる」と語るソクラテスの言葉は、「どれほど彷徨うとしてもひとはその心の果てを見いだすことができない」というヘラクレイトスの断片と考え合わせると、人口に膾炙されてきた箴言に潜むさらなる「険」の深みを暗示しているように思われる。

「学習之蔽、殆ど礫石を擲つ」という梅園の言葉は、あるいは流れに逆らつて棹さすものと見えるであらう。しかし「険」なるものに慣れることなく、自己自身であつてそうでないようなわれわれのこの「心」の深淵、われわれがあらゆるものと共にそこに住まうこの「世界」の無辺を誠実に試みてゆくことこそ本来の道ではあるまいか。日暮るるに道なおいまだ遠しと嘆く者の自戒である。

平成十九年三月二日

藤田 一美